

中学生における受け手に着目した効果的な“ほめ”の検討

The examination of effective praise focused on receiver in junior high school students

1215111 佐伯紫苑

本修士論文は、2つの研究から構成された。研究1は、大学生における受け手に着目した効果的な“ほめ”の検討、研究2は、中学生における受け手に着目した効果的な“ほめ”の検討である。

要 旨

【研究1】

「ほめる」という行為は、動機づけや自尊感情を高め、運動技能学習に影響を与えるなどの効果があるとされてきた。これらの研究では、ほめ手の視点に立った研究が多く行われてきた。しかしながら、「ほめ」による効果は、その受け手がそれを「ほめ」と認知するかどうかによって、十分な効果が発揮されるものであると考えられるため、「ほめ」の受け手の視点に立った「ほめ」の研究が重要であると考えられる。本研究では、一般的にどのようなほめられ方がうれしいと、受け手に認知されているのか、その構成要素について検討する。大学3年生、4年生、院生の計79名を対象に、今までに受けたうれしいほめられ方を尋ねるワークシートを作成し、自由記述形式によって回答を求め、KJ法により回答を分類した。その結果、学年に関わらず、“ほめ方”、“ほめの対象”、“関係性”という3個の大カテゴリを得られた。以上の結果から、一般的に人はこれらの要素を考慮して、うれしいほめられ方か、そうでないかを判別している可能性が強く示唆された。

【研究2】

「ほめる」という行為は、物理的報酬を与えるものと言語的報酬を与えるものに分類され、さらに、言語的報酬の中でも声かけの種類によって、様々に分類することができる。本研究では、IメッセージとYOUメッセージという観点およびWeinerの帰属理論の観点から、声かけの種類を考慮し、受け手にとっての効果を検討した。加えて、研究1より明らかとなったうれしいほめられ方の構成要素のうち、ほめ手と受け手の間にある関係性についても着目した。中学校1年生、2年生、3年生の計840名を対象に、成功場面と失敗場面について、教師との関係性と声掛けの種類の2つの要因が、安堵感情、嫌悪感情、褒められ感情、承認感情、慰め感情、励まされ感情、次回への意欲、やる気の変化にどのように影響するのかを検討した。その結果、成功場面においては、教師との信頼関係がある条件において、YOUメッセージである「結果+努力」フィードバックが最も効果的であることが明らかとなった。また、失敗場面においては関係性に関わらず、Iメッセージである「結果+期待」フィードバックとYOUメッセージである「結果+課題」フィードバックが効果的であるということが明らかとなった。